

会議名	2006年度日本草地学会つくば大会
開催日時	平成18年3月27日(月) - 28日(火)
開催場所	農林水産技術会議事務局筑波事務所(つくば市観音台)
主催者	日本草地学会 シンポジウムは 畜産草地研究所 との共催
参加人数	約200人(草地に関わる研究者・技術者・行政関係者等)
1. 会議の概要(500 - 1000字程度または議事内容の資料添付)	<p>一般発表は5会場で口頭発表132課題、ポスターセッション79課題だった。参加者は約200名、盛況であった。また、総会に引き続き学会賞受賞講演があった。</p> <p>これに先だって、畜産草地研究所との共催で「草地と野生動物のかかわり」の公開シンポジウムが行われた。その概要を記す。</p> <p>1. 草地・森林の変遷とチョウ類の保全(井上大成・森林総研) チョウの種数や個体数は草原(採草地)で最も多く、広葉樹の伐採跡地や若いスギ植林地は草原との共通種も多く、種類組成は似ていた。若い植林地では毎年下刈りが行われ、草原的な環境が人為的に維持されているからと考えられる。チョウの衰退の理由は、雑木林の更新や草刈り野焼きなど伝統的な管理の衰退・放棄と考える。</p> <p>2. 草地における糞虫の多様性と役割(井村治・畜草研) 栃木県の放牧地の調査結果をもとに糞虫(コガネムシ類)の生息状況と機能・役割を報告した。糞虫は糞の中に棲息するものと、糞直下に糞を引きこむもの等あるが、糞虫によって糞の分解が促進される。そのことによって例えば不食過繁地の形成を抑制することに大きく与っている。</p> <p>3. 草地における野生哺乳動物の生息実態と意義(塚田英晴・畜草研) その大半は森林を主たる生息地とするものの草地を生息地を含む哺乳類は51種認められる。小型種ではハタネズミ・カヤネズミは草地依存性が高く、アカネズミは多岐の環境に生息する。中大型種では、ノウサギ、キツネ、タヌキが放牧地を主とした生息地とし、一部ではニホンジカが生息した。最近中山間地を中心に獣害が深刻になっているが、耕作放棄地や放牧地の縮小による遷移の進行がこれらの動物の増殖に適した環境を増大させた可能性がある。草地として良好に管理されれば、草地は森林から農地への動物の侵入を抑制する効果が期待できる。</p> <p>4. 放牧導入による獣害回避の可能性(井出保行・畜草研)</p>

	<p>耕作放棄地ではススキ、クズが繁茂することが多く、これがイノシシの隠れ家と根茎が餌資源となる。また、ススキ草地に放牧を導入するとススキが衰退し、代わってワラビが繁茂し、この根茎がイノシシの餌資源となる。井出氏もよく管理された草地を緩衝地帯と配置することで獣害回避に有効な手段となることを提起した。</p>
<p>2. 今後の研究開発分野として重要と思われる関連発表課題・話題提供名(分野と課題提供名ごとにその概要を200400字程度)</p>	<p>学会賞受賞講演として「稲発酵粗飼料の収穫調製機械の開発と作業技術体系の確立」(浦川修司・三重県科学技術振興センター畜産研究部)自脱コンバイン(5条刈り)の脱穀部の代わりにロールベールアタッチを搭載したダイレクトカット方式の自走式ロールベールを開発した。同じく2条刈り自脱型コンバインをベース機として小型飼料イネ用ロールベラーを開発、実用化した。また飼料イネ用ロールベラーと組作業を行うための自走式ベールラップを開発した。本機は圃場に分散したベールを機体前方から積載できる。これらにより圃場条件に影響されることなく飼料イネの収穫から梱包、密封から運搬車への積み込み作業までの体系が確立された。更にロールベールの保管場所での荷下ろしや積み込み作業のための簡易ベールハンドラを開発し、一貫した体系が確立された。最近高品質なサイレージ調製のための専用乳酸菌が開発され、乳酸菌の添加の要望も多くなっているため、飼料イネ用ロールベラーに装着できる自動添加装置を考案した。</p> <p>同じく学会賞受賞講演として「ネピアグラスの乾物生産及び栄養品質特性の解明と南九州における永年利用法の確立」(石井康之・宮崎大学)南九州では越冬が困難であると考えられていたネピアグラスの越冬メカニズムを解析し、11月以降に20cm以上の刈り株を残し、越冬休眠芽を十分に確保し、また十分な越冬芽を確保するために8月以前に草地造成することに重要性を提起した。その上で施肥、刈り取り間隔、標高などの要因と組み合わせ乾物生産及び栄養品質の特性を明らかにし、南九州におけるネピアグラスの持続的な栽培技術を確立した。さらに、ネピアグラスの中でわい性系統の品種を用いると放牧利用も可能で採食性も優れていることを認めた。これらの技術は夏季高温の南九州の安定的な粗飼料生産に有効であると考えられる。</p>
<p>3. その他の発表で関心のあったもの(課題ごとに概要を400字程度)</p>	<p>研究奨励賞「衛星リモートセンシングとGIS(地理情報システム)を利用した中国内モンゴルの放牧モニタリング技術の開発」両者を組み合わせることで草量、草質(粗蛋白)及び季節変化などを把握できることを明らかにし、GPS(全地球測位システム)によって放牧家畜の空間分布パターンを把握し、さらにGPSとGISを利</p>

	<p>用して草地の草量に見合った適切な放牧強度を定量的に示すことが可能になった。</p>
<p>4 . 今後研究開発課題採択に当たって参考にすべき事項等</p>	<p>研究奨励賞「草地生態系におけるアーバスキュラー菌根菌の動態に関する研究」(齊藤勝晴・科学技術振興機構)アーバスキュラー菌根菌は孢子形態から約150種が記載されている。種のもつ共生機能はそれぞれ異なり、フィールド研究で菌種を特定することは重要であるが、菌種の同定はこれまで困難であった。それをDNAマーカーを用いることで簡単な菌根菌同定法を開発した。これによって半自然草地の菌根菌分類群の同定と群ごとの感染率の半定量化が可能になった。実際半自然草地で菌根菌の動態を解析したところ、ススキ、シバでは感染する菌根菌群が異なっており、植生遷移と菌根菌群集の遷移は密接に関連していることが示唆された。また、菌根菌のリン酸輸送機構の細胞学的解析を試みた。現在、リン酸輸送機能の指標となるオルガネラや生理現象の解明をめざして研究を進めている。将来リン鉱石の枯渇が予想されるとき、草地生態系におけるリン循環に果たす菌根菌の役割を明らかにしておくことは重要な課題である。</p>
<p>5 . 報告者</p>	<p>太田 顯</p>